

いろいろな人たちが子育てにかかわる仕組みを

「親が育てる」という先入観を捨てる

今必要なのは「脱・家庭」である――。

家庭以外の場所でも子どもは育つ、という認識を、社会共通のものにする。そのために周囲の人や地域や市区町村ができることは何か。子どもを支援することこそ重要、と説く林浩康さんに聞いた。

日本女子大学人間社会学部教授

林 浩康

●はやし・ひろやす 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程修了教育福祉。東洋大学ライフデザイン学部教授を経て、現職。養子と里親を考える会 事務局長。編著書に『里親委託・養子縁組の支援』（明石書店）、『児童・家庭福祉』（ミネルヴァ書房）など多数。

親の責任が強化されている

――日本は少子化対策に取り組もうとしています。現在の日本の子育て環境について感じておられることは？

正直に申し上げて、子育てしにくい環境になってきていると思います。高度経済成長期以降、残念ながら、

徐々に地域のコミュニティは喪失していきました。地域コミュニティが機能していれば、子どもたちと周囲の大人たちは、濃淡こそあれ、かわりがありましたし、ワルさをしていない子どもがいれば、大人たちは遠慮なく叱りました。泣いている子どもがいれば、「どうしたの？」と声をかけていましたね。

高度経済成長期以前の親は今と比

もはや望めません。そうになると、子育てはもっぱら親が担い、補完的に保育園などのサービスに依存するしかありませんから、行政側にコストがかかりますね。

日本は一貫して家庭の大切さを強調し、保護者の第一義的な責任を重くみてきたのですが、現実的には、今の親は疲弊してしまっています。

「子どもの出来は親次第」などと言われることがあるので、子どもに関する深刻な問題ほど、親は隠す傾向にあり潜在化していきます。現在は、生活に困っている家庭でも、格安の衣料品やきれいな中古品がありますから、身ぎれいな服装で貧困を感じさせない生活をしているケースも多く、実際にはDV（家庭内暴力）や虐待があっても見逃してしまうこともあるのです。

インスタグラムなどで、家族や子

どもの写真が公開されていますが、その多くが幸せそうな写真です。視覚化されることで、ますます「幸せな家庭」という固定概念が強化されていると思います。発信するツールは多様化していても、家庭とはこうあるべきという理想像や規範意識が強すぎて、自分の弱みを誰にも伝えられないのです。

――親の収入が、子どもの学歴、人格形成に大きく影響するなどと言われていますが。

そうですね、その傾向はあります。子どもの学力の格差も顕著ですが、それ以上に生きていく力として重要な自尊心、自己肯定感、意欲、レジリエンス（危機をはねつける力）など、これらすべてに差が出ます。こうした力は、親や周囲の大人から「大切にされた」「守られた」という体験から培われますが、将来、その体験

べれば、ある意味、いい加減でした。多くの家庭は自営や農業で、子どもにかわりたくてもかわられない状況があり、地域の支援を受けながら子育てをしていたのです。日本では、「子育ては村や町中の人が必要だ」という時代のほうがずっと長かったです。

地域の大人たちも子どもを育てる一員――そういった環境は、現在は

がない子どもたちと、ある子どもたちで、今以上に著しい格差として現れると思います。

今、求められているのは、親の責任を重くし、影響を強化することではなく、むしろ親の影響を希薄化させ、周囲が子どもへ直接支援できる体制を充実させることだと思っています。「子育て支援」と銘打ってはいても、親の話を聞いて困りごとを解決していく施策が多い。これは、つまり親支援です。もつと子どもに焦点をあて、直接子どもを支援できるような仕組みを、小さな地域、つまり市区町村の中にかに作っていくかが重要になってくると思います。

地域で子育てに厚みを持たせる

――何か打開策はあるのでしょうか？